服装の評価に及ぼす提示試料の背景・相貌の有無の影響

田岡 洋子*, 土井千鶴子**, 大林 冷子***, 中川 早苗****, 家本 修*****

Clothing Evaluation Produced by Presence of the Background and Face of Stimulus Persons

Hiroko Taoka*, Chizuko Doi**, Reiko Ohbayashi***, Sanae Nakagawa****, Osamu Iemoto*****

Abstract

When clothing is estimated by photograph and slide, the effects of figure and background have not been discussed satisfactorily. The effects of presence of background and figure on estimation of clothing were studied in this paper by selecting four kinds of clothes such as ordinary wear, street clothes, working clothes and party dress and 317 subjects of women students using 20 scale items of estimation.

The effects were investigated by two-way layout or factorial design of analysis of variance. The obtained results showed the presence of background and figure had a great influence on valuation of clothing, although there were differences among the kinds of clothing.

(Received April 4, 1997)

(Accepted by Publication Sept. 9, 1997)

1. 緒 言

日常、私たちは着装された服装を評価する場合、衣服だけを純粋に評価することはほとんどなく、無意識のうちに、着装者の身体、相貌、持ち物や着装場面なども含めて、総合的に評価しているように思われる。また、ファッション雑誌や通信販売カタログなどに掲載されている服装写真も同じことで、着装者の容貌や写真の背景の良否が服装の評価に影響を及ぼしているのではないかと推測される。

これまで、服装の提示方法の違いによる評価への影響については川端ら¹⁾が実物、写真、スタイル画の3種の方法で提示した場合、提示方法が服装イメージの評定に影響を与えると指摘している。また、山本ら²⁾は服装イメージに与える服装写真の背景の影響について研究し、背景の影響を受けやすい服装と受けにくい服装があると述べている。しかし、服装写真の背景の有無、相貌の有無の影響については充

分な検討が行われていない。そこで、本研究では着装場面の異なる「日常着」、「街着」、「仕事着」、「パーティ着」の服装を選定し、被験者に背景の有無、相貌の有無の状態での服装スライド写真を提示し、その背景・相貌の有無や交互作用による服装の評価に違いがみられるかどうかを検討することを目的とする。

2. 方 法

2.1 提示試料

提示試料はあらかじめ着装場面の異なる4種類の服装(日常着・街着・仕事着・パーティ着)を想定し、学生の好む服装写真を市販のファッション雑誌(1996年8月号)から多数収集した。その中から今回の研究目的に最もふさわしいものを各場面について1枚ずつ選定して、Fig. 1に示す。それぞれの着装場面での背景および服装は次のようである。日常着

*京都短期大学, Kyoto Junior College, 福知山市字堀, **Member, 兵庫県立姫路短期大学, Himeji Junior College, 姫路市新在家本町, ***Member, 芦屋女子短期大学, Ashiya College, 芦屋市六麓荘町, ****Member, 奈良女子大学, Nara Women's University, 奈良市北魚屋東町, *****Member, 大阪経済大学, Osaka University of Economics, 大阪市東淀川区大隅

A

B

C

D

Fig. 1 Photographs of four kinds of clothing used for sensory excitation

はグラウンドが背景で、服装は薄い水色のシャツカラーのワンピースである。街着は屋外の白いテーブルが背景で、服装は黒地に小花柄のブラウスと焦げ茶のパンツである。仕事着はエアーターミナルが背景で、服装はベージュのパンツスーツとオレンジのブラウスである。パーティ着はホテルのフロントが背景で、服装は衿なし袖なしのプレーンな白いワンピース

ースである。

次に、各着装場面について同一写真を2枚ずつ用意し、これを背景の有無、相貌の有無の4種類に加工した。背景無しの写真は1枚の写真の背景をカッターで切り除いた。相貌無しの写真は首の上からグレー紙を置き撮影した。例えばパーティ着の場合はFig. 2のように4枚のスライド写真を作成した。

D-1

D-2

D-3

D-4

Fig. 2 Four Photographs of party dress used for experimental excitation

2.2 評定尺度の構成

服装を評定する尺度項目はこれまで多数作成されているために、これら先行研究³⁾を参考にして、ファッション性、活動性、洗練性、女らしさ、評価性の基本的な5因子を想定した。これらの各因子を代表する尺度項目計18項目に、総合的な評価項目とし

て、「好きな／嫌いな」「着たい／着たくない」の2項目を加えて20項目を選定し、これらの項目について両極7段階尺度で評定させた。

2.3測定方法

4種類の着装場面に対し、それぞれ背景の有無と相貌の有無の計16枚のスライド写真を作成した。被

Table 1 Allotment of presentation samples of clothing

服種	提示方法	背景有		背景無	
		相貌有	相貌無	相貌有	相貌無
A(日常着)		1	2	3	4
B(街着)		2	3	4	1
C(仕事着)		3	4	1	2
D(パーティ着)		4	1	2	3

験者は近畿地区の4大学的女子学生317名である。同一服種の提示条件の異なる4枚の服装写真はそれぞれ異なった被験者に提示するため、大学(1~4)別にTable1のように配布した。なおスライド写真は教室において150×150cmのスクリーンに映写し、評定を求めた。実験は1996年9月に前述の評定尺度を用いて、各大学の教室において集団実施した。

2.4 分析方法

まず、服装評価に及ぼす背景・相貌の影響を検討する、各着装場面別に20項目の評定値を従属変数に、背景の有無、相貌の有無の2要因(各2水準)を独立変数とし、2元配置分散分析を行った。さらに総合的評価項目の「好きな」、「着たい」については、各着装場面別に背景無し相貌無し、背景有り相貌無し、背景無し相貌有り、背景有り相貌有りについて評定平均値をもとに評価の差異を検討した。

次に、服装評価の基本的因子別に、「好きな／嫌いな」、「着たい／着たくない」を除いた18の質問項目を変数に主因子法による因子分析を行った。被験者317名がそれぞれ服装刺激を4枚評定したため、観測回数は合計1268ケースである。なお因子の抽出基準は固有値1.0以上とし、バリマックス回転法により因子軸の回転を行い、因子得点を求めた。

さらに、背景の有無または相貌の有無によって因子得点に差があるかどうかについて多元配置分散分析を行った後、服種ごとに因子得点を算出し、背景・相貌の有無によるT検定を行った。

3. 結果および考察

3.1 服装評価に及ぼす背景・相貌の影響

服装評価に及ぼす背景・相貌の有無の影響を検討するため、服種別に2元配置分散分析をした結果をTable2に示す。これらを服種別に比較すると、日常着では相貌の有無による影響がほとんどの項目においてみられたが、背景の有無による影響は半数ほどの項目において有意差がみられた。街着、仕事着、パーティ着では背景の有無による影響が半数ほどの項目に有意差がみられ、相貌の有無の影響は非常に少なく、服種によって差が認められた。

一方、評定項目別に比較すると、「若々しい／大人

Table 2 Results of two-way layout analysis of variance against the kinds of clothing

服種	日常着		街着		仕事着		パーティ着	
	背景	相貌	背景	相貌	背景	相貌	背景	相貌
ファッションブルな		**	*	**				
若々しい	***	***	*	***	*			**
高級な	***	***			***		*	
ロマンチックな	*				*		***	
目立つ		***	***			**		
個性的な	*	**	***					
シンプルな		*	***		**	*		
調和した		***						
女性的な	***	**	***		*	*		
美しい	***	***			*	***	*	
派手な		***	***		***			
活動的な	***	*	***					
上品な	***	***	*				*	
魅力的な	*	***			*	*		
奇抜な			***		*			
カジュアルな	***	**					**	
センスがよい		***		**	***			**
繊細な	***	***	**				***	
好きな		**	*		***		**	***
着たい		***	*		***		***	
有意差のある項目数	10	19	13	3	10	6	9	3

*** p<0.001
** p<0.01
* p<0.05

Fig. 3 Plot of average rating scale values of "like/dislike" and "feel like wear/hate wear" against the kinds of clothing

A : ordinary wear

B : street clothes

C : working clothes

D : party dress

○ : background figureless

● : figureless with background

● : without background with figure

● : background figure

っぽい」、「女性的な／男性的な」、「美しい／みにくい」、「好きな／嫌いな」などの項目において有意差がみられた。一方、「調和した／不調和な」、「奇抜な／無難な」についてはほとんど有意差が認められなかった。

次に総合的評価項目の「好きな／嫌いな」、「着たい／着たくない」の評価に及ぼす背景・相貌の影響を調べた。Fig. 3は服種別に第1軸「好きな／嫌いな」、第2軸「着たい／着たくない」の平面に評価平均値をそれぞれプロットしたものである。

日常着(A)では背景・相貌がともに無しは「好きな」「着たい」という第1象限に位置するのに対し、相貌が加わったり、背景・相貌がともに加わると、逆に「嫌いな」、「着たくない」という第3象限へ移行する。街着(B)では背景・相貌がともに無しは「嫌いな」、「着たくない」に位置するのに対し、背景・相貌がともに加わると、プラス方向の第1象限へ移行する。仕事着(C)では背景・相貌がともに無しは「嫌いな」、「着たくない」という第3象限に位置する

のに対し、背景や相貌が加わると「好きな」、「着たい」のプラス方向へ移行する。パーティ着(D)においても、相貌が加わると「好きな」のプラス方向へ、背景が加わると「好きな」、「着たい」のプラス方向へ移行し、特に背景・相貌がともに加わると、「好きな」、「着たい」という第1象限へ移行する。

このように「好きな／嫌いな」、「着たい／着たくない」の評価に及ぼす背景や相貌は服種によって差が認められ、今回試料として用いた日常着では背景や相貌の存在はマイナスに作用するのに対し、仕事着、パーティ着ではプラスに作用することがわかった。このことから日常着の場合は服装写真の背景や相貌が被験者から見て服装に適合していなかったことが推察される。

3.2 服装評価因子に及ぼす背景・相貌の影響

ここでは評価項目から基本因子を抽出し、因子別に背景・相貌の有無の影響を検討する。まず、服装評価の基本的因子を抽出するために「好きな／嫌いな」、「着たい／着たくない」の項目を除いた18の質問項目を変数とし、因子の抽出基準は固有値1.0以上として、主因子法による因子分析(バリマックス回転)を行った。その結果Table 3に示すような因子負荷量が得られ、4つの因子が抽出された。

第1因子は「個性的な／平凡な」、「派手な／地味な」、「目立つ／目立たない」、「奇抜な／無難な」などの項目に因子負荷量が高く、ファッション性の因子と解釈した。第2因子は「センスがよい／やばいたい」、「美しい／みにくい」、「魅力的な／魅力的な

Table 3 Estimation scale items of clothing and results of factor analysis

因子	評価項目	因子負荷量	因子の意味	因子の寄与率
1	個性的な	0.811	ファッション性	(%) 29.7
	派手な	0.775		
	目立つ	0.747		
	奇抜な	0.708		
	シンプルな	0.698		
2	ファッション的な	0.545	洗練性	23.8
	センスがよい	0.817		
	美しい	0.723		
	魅力的な	0.661		
	調和した	0.605		
3	おとなしい	0.686	女らしさ	8.8
	女性的な	0.668		
	ロマンチックな	0.579		
	繊細な	0.565		
	上品な	0.546		
4	フォーマルな	0.525	成熟性	6.0
	大人っぽい	0.724		
	高級な	0.687		
4因子までの累積寄与率(%)				68.3

Table 4 Results of factorial design analysis of variance using factor

		第1因子 (ファッション性)	第2因子 (洗練性)	第3因子 (女らしさ)	第4因子 (成熟性)
主効果	背景		***	***	
	相貌	***		**	***
2つの交互作用 (背景×相貌)		**		*	**

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

い, 「調和した／不調和な」に因子負荷量が高く, 洗練性の因子とした. 第3因子には「おとなしい／活動的な」, 「女性的な／男性的な」, 「ロマンチックな／現実的な」, 「繊細な／粗雑な」などに因子負荷量が高く, 女らしさの因子とした. 第4因子は「大人っぽい／若々しい」, 「高級な／安っぽい」に因子負荷量が高く, 成熟性の因子と解釈した. 4因子までの累積寄与率は68.3%である.

服装評定尺度を作成するにあたり, 当初, 5因子を想定したが, 因子分析結果では4因子が得られたため, 4因子で因子得点を算出した.

服装評価の基本因子別に背景・相貌の影響を検討するため, 因子分析で得られた4因子の因子得点を従属変数とし, 背景の有無(2水準)・相貌の有無(2水準)の2要因を独立変数とし, 多元配置分散分析を行った. その結果をTable 4に示す.

その結果, 服種に関係なく, ファッション性の因子と成熟性の因子では, 相貌の有無により0.1%の危険率で有意差が認められ, 背景の有無と相貌の有無の交互作用も認められた. 一方, 洗練性の因子と女らしさの因子では逆に, 背景の有無により0.1%の危険率で有意差が認められた. さらに女らしさの因子では背景の有無と相貌の有無の交互作用にも有意差が認められた. これらの結果から刺激として用いた服種の如何を問わず, 4因子とも背景・相貌のいずれか, または両方に有意差が認められた. また交互作用についても第2因子を除く3因子において有意差が認められたため, 背景・相貌の有無が因子別にみても服装評価に影響を与えることがわかった. そこで服種別に背景・相貌の有無が因子別の服装評価にどのような影響を及ぼすかを検討した. 第1軸ファッション性, 第2軸洗練性の平面に因子得点の平均値をプロットしたものをFig. 4に示す.

パーティ着(D)は第1象限に位置し, 背景・相貌が加わると洗練性がややプラス方向へ移行する. 日常着(A)は第2象限に位置し, 背景が加わると, フ

Fig. 4 Plot of factors of the first factor (fashionability) and the second factor (refinement) against the kinds of clothing

ァッション性がプラス方向へ移行するのに対し, 相貌あるいは背景・相貌がともに加わると洗練性はマイナス方向へ移行する. 仕事着(C)は第3象限に位置し, 相貌が加わるとファッション性, 洗練性がともにマイナス方向へ, 背景や背景・相貌がともに加わると, 洗練性はプラス方向へ, ファッション性はマイナス方向へ移行する. 街着(B)は第4象限に位置し, 背景が加わるとファッション性はマイナス方向へ, 背景・相貌がともに加わるとファッション性はマイナス方向へ, 洗練性はプラス方向へ移行する.

これらの結果から当初, 服装写真に背景や相貌が加わるとファッション性や洗練性はプラス方向へ移行すると仮定したが, 必ずしもプラス方向へ移行するとは限らず, マイナスへ移行する場合もあることが明らかになった.

同様に, 第1軸に女らしさ, 第2軸に成熟性をとり因子得点の平均値をプロットしたものをFig. 5に示す.

Fig. 5 Plot of factors of the third factor (femininity) and the fourth factor (maturity) against the kinds of clothing

パーティ着 (D) は第1象限に位置し、背景・相貌が加わると女らしさがプラス方向へ移行し、仕事着 (C) は第2象限に位置し、背景・相貌が加わると成熟性はプラスへ、女らしさはマイナス方向へ移行する。街着 (B) は第3象限に位置し、背景・相貌が加わると、成熟性がマイナス方向へ移行する。日常着 (A) は第4象限に位置し、背景が加わると女らしさ、成熟性がプラス方向へ移行する。このように第3因子と第4因子についても同様に、提示試料の背景・相貌が服装評価にプラスにもマイナスにも影響することが明らかになった。

最後に、背景の有無、または相貌の有無によって各因子に有意差があるかどうかを服種別に T 検定をした。その結果を Fig. 6 に示す。

Fig. 6-1 は背景有りにおける相貌の有無の場合、Fig. 6-2 は背景無しにおける相貌の有無の場合、Fig. 6-3 は相貌有りにおける背景の有無の場合、Fig. 6-4 は相貌無しにおける背景の有無の場合である。これら4種類の組み合わせのうち、Fig. 6-1 と 6-4 の場合に有意差が最も多くなり、合計10か所に違いが認められたのに対し、Fig. 6-2 の場合には半数の5か所しか有意差が認められなかった。また、Fig. 6-2 の場合には、すべて相貌のない方に、Fig. 6-3 ではほとんどが背景のある方にそれぞれ評価が高いのに対し、Fig. 6-1、6-4 では服種や因子によって違いが認められた。

このように、背景や相貌の存在が服装の評価に必ずしも好意的な評価を与えなかったり、逆に背景や相貌が存在しない場合でも服装評価が高くなる場合

もあり、背景や相貌の選択いかんによって、また有無によって服装の評価が左右されることが明らかになった。また、ファッション雑誌やカタログ誌における服装の評価もこれらの影響を考慮する必要があるといえよう。

4. 要 約

着装場面の異なる「日常着」、「街着」、「仕事着」、「パーティ着」の服装を選定し、背景の有無、相貌の有無のスライド写真に加工して女子学生の被験者に提示し、20項目の評定尺度で評定を求め、服装評価に違いがみられるかを検討した。

服装の評価に及ぼす背景・相貌の有無の影響を2元配置分散分析を行って検討した結果、いずれの服種においても評定項目に有意差が認められたが、相貌より背景による影響が大きいことが明らかになった。

服種別に比較すると、日常着では相貌の有無による影響が大きく、ほとんどの項目で有意差がみられたが、背景の有無では半数ほどの項目に有意差がみられた。一方、街着、仕事着、パーティ着では背景の有無による影響の方が大きく、半数ほどの項目に有意差がみられ、相貌の有無の影響は非常に少なく、服種によって差が認められた。

次に、服装評価の基本因子別に背景・相貌の影響を検討したところ、服装写真に背景や相貌が加わるとファッション性や洗練性、女らしさや成熟性の評価が必ずしもプラス方向へ移行するとは限らずマイナスへ移行する場合もあることが明らかになった。

服種別では日常着に最も多く有意差がみられたが、パーティ着では少なく、服装全体で、有意差があった試料は背景があって相貌が有無の場合と相貌が無くて背景が有無の場合である。このように、提示する服装写真の背景や相貌は服装評価に少なからず影響を与えるため、今後、服装の評価に際しては提示試料の背景や相貌を考慮する必要があることがわかった。

また、ファッション雑誌やカタログ誌などに掲載されている服を評価する場合も、背景や相貌の影響を考慮する必要があることがわかった。

本研究は、本学会被服心理学研究分科会（大阪）において行った研究を、まとめたものである。概要を日本家政学会第49回全国大会（1997）において発表した。

おわりに、ご指導を賜った鳴門教育大学藤原康晴

Fig. 6 T-test of factors of the presence of background and figure vs. the kinds of clothing

先生に深謝する。

参考文献

- 1) 川端澄子, 家本修; 日本家政学会第39回大会研究発表要旨集, 日本家政学会, 173 (1987)

- 2) 山本昌子, 黒田喜久枝, 山田千賀子, 太田健一; 第49回年次大会研究発表論文集, 日本繊維機械学会, 94-95 (1996)
- 3) 繊維学被服心理研究分科会編; 被服心理学, 65.98.179.184, 日本繊維機械学会 (1990)